

平成 24 年度
横須賀美術館 運営評価報告書

平成 25 年（2013 年）7 月

横須賀市教育委員会

美術館運営課

目 次

1	平成 24 年度 横須賀美術館の運営評価について	1
2	平成 24 年度の運営評価システム	3
3	平成 24 年度の運営評価結果	6
	(1) 美術館による一次評価	
①	広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。	7
②	市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。	11
③	調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。	15
④	学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。	22
⑤	所蔵作品を充実させ、適切に管理する。	25
⑥	利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。	27
⑦	すべての人にとって利用しやすい環境を整える。	31
⑧	事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に 運営・管理する。	34
	(2) 運営評価委員会による二次評価	
①	広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。	37
②	市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。	39
③	調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。	40
④	学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。	41
⑤	所蔵作品を充実させ、適切に管理する。	42
⑥	利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。	43
⑦	すべての人にとって利用しやすい環境を整える。	44
⑧	事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に 運営・管理する。	45
4	横須賀美術館運営評価委員会 委員名簿	46
5	横須賀美術館運営評価委員会条例	47

はじめに

横須賀美術館の運営評価については、開館前の平成 19 年 3 月に発足した評価委員会において、3 年間ほど評価システムの構築に関して議論を重ねてきました。点検評価の初年度版になります平成 21 年度の活動の評価は、そうした検討に基づくシステムを通して行ったものです。そしてその後も、自己点検・自己評価の課題や改善点の検討を重ねながら、横須賀美術館独自の評価システムを確立させる中で、4 回目となる平成 24 年度の評価を行いました。

平成 24 年度の評価システムは、前年の平成 23 年度のシステムと同様、3 つの使命に基づく 7 つの目標と、経営的視点による目標を加えた計 8 つの目標になっています。評価結果を昨年度と比較してみますと、高く設定した目標を達成したものがあある反面、やや評価を下げたもの、また、改善がなされていないものもあります。課題として残りましたものにつきまは、問題点を精査し、改善に向けて取り組んでまいります。

また、運営評価委員会における今回の二次評価は、すべての項目について一次評価と一致する結果となりました。第三者における評価システムが重要視されていますが、肝要なことは、当事者が自らを律し、自らを厳しく位置づけることにあります。美術館の自己点検・自己評価は、一次評価の段階で点検と評価を厳しく行い、客観的に行われていることを裏付けているものと考えています。

平成 24 年度は横須賀市経済部が主体となった特別企画展を 2 回試行いたしました。この特別企画展を美術館の運営評価にどのように位置づけていくのか、美術館においても、運営評価委員会においても議論になりました。今回の評価に至るまでの論議、評価結果を、今後、美術館の運営改革を検討するなかに活かしていきたいと考えています。

評価システムは、日常的に行われている美術館活動を点検評価し、課題の改善につなげるツールとして活用するものです。このツールを最大限活用し、良い評価を得た活動は更なる継続を、課題については解決へ取り組んでいくことで、市民に親しまれる美術館として活動を続けてまいります。

平成 25 年 7 月

横須賀美術館
館長 渡辺大雄

1 平成 24 年度 横須賀美術館の運営評価について

(1) 運営評価の目的

横須賀美術館の運営評価は、現在行っている活動を振り返り、適正に行われているかを自己点検することで課題や反省を自覚し、改善点の検討につなげるものです。

美術館は 1 年間の活動をまとめ、自らの評価（一次評価）を行います。一次評価を運営評価委員会に報告し、運営評価委員会は活動内容を市民目線でチェックし、二次評価を行います。併せて、美術館の業務改善、よりよい活動につなげていくことを目的として、改善点や活動の提言を行います。

5 頁に掲載した図のとおり評価全体の流れは PDCA サイクルによる改善を基本としています。個々の業務を計画（P:Plan）し、実行（D:Do）していき、その内容を評価（C:Check）し、これを改善（A:Action）につなげていきます。

毎年この活動を繰り返していくことで、よりよい横須賀美術館を目指していくものです。

(2) 評価項目

横須賀美術館は、その設置条例第 1 条に「美術を通じたさまざまな交流の機会を促進し、市民の美術に対する理解と親しみを深め、もって文化の向上を図る」と、設置の目的を明記してあります。そしてこの目的に沿った「使命」を掲げ、「使命」に基づいた「目標」を示し、この目標を評価項目として体系づけました。それぞれの目標には、「達成目標」と「実施目標」を掲げ、これが具体的な評価をしていく項目となります。

なお、「達成目標」は数的指標であり、具体的な数値目標が示されるため、達成の成否は客観的に明らかです。評価者は、その他の資料もあわせみたくうえで、達成の度合いを判断し、総合的な評価を行います。

いっぽう、「実施目標」は質的指標であり、評価者は、運営者の行動報告に基づいて、主観的評価を行います。

評価項目は、「平成 24 年度評価システム」として 3～4 頁をご覧ください。

(3) 評価基準

達成目標と実施目標共通の基準を設けています。

目標に到達したかを S から D の 5 段階とし、以下の基準としました。

S：優れた成果を挙げている

A：目標を達成している

B：目標をほぼ達成している

C：目標にはほど遠い。より一層の努力を要する

D：努力が結果に結びついていない。方法そのものについて再検討を要する

二次評価を評価委員が行う際には、上記のほか、F：判定不能を設けています。

*現在の評価項目は、平成 22 年度に見直し、現在に至っています。

(目標の性格)

目標の性格 (平成22年度から)

「目標」ごとに、「達成目標」と「実施目標」を設けた。

「達成目標」: 数的指標

- ・「目標」の達成度合いを端的にしめす数値目標。
- ・主に外的要因(来館者の動向など)によって結果が左右される。
- ・達成したかどうかは客観的に判断される。
(達成した場合のS/Aの別、達成しなかった場合のB~Dの別は、各委員の裁量の範囲。)

「実施目標」: 質的指標

- ・「目標」を達成するための行動計画。
- ・運営者側の計画的な行動であり、じゅうぶんであるかどうかは、各委員の主観的な判断による。
- ・端的な指標に過ぎない「達成目標」のみでは把握できない部分を補う役割がある。

(評価基準)

「達成目標」と「実施目標」に共通の評価基準を適用する。

評価基準 (平成22年度から)	
すぐれた成果を挙げている。	S
目標を達成している。	A
目標をほぼ達成している。	B
目標にはほど遠い。 より一層の努力を要する。	C
努力が結果に結びついていない。 方法そのものについて再検討を要する。	D
判定不能	F

S~Dの5段階評価に、F(判定不能)を加えた。AとBの間に「目標」がある。

・目標を達成していれば「A」以上となり、よい評価であることがわかりやすい。

・目標より下に段階を設けることにより、目標を達成していない場合、その度合いを表現しやすくなった。

・結果が著しく劣っている、あるいは努力の方向が間違っているために、方法そのものの再検討が必要な場合のために、「D」評価を設けた。

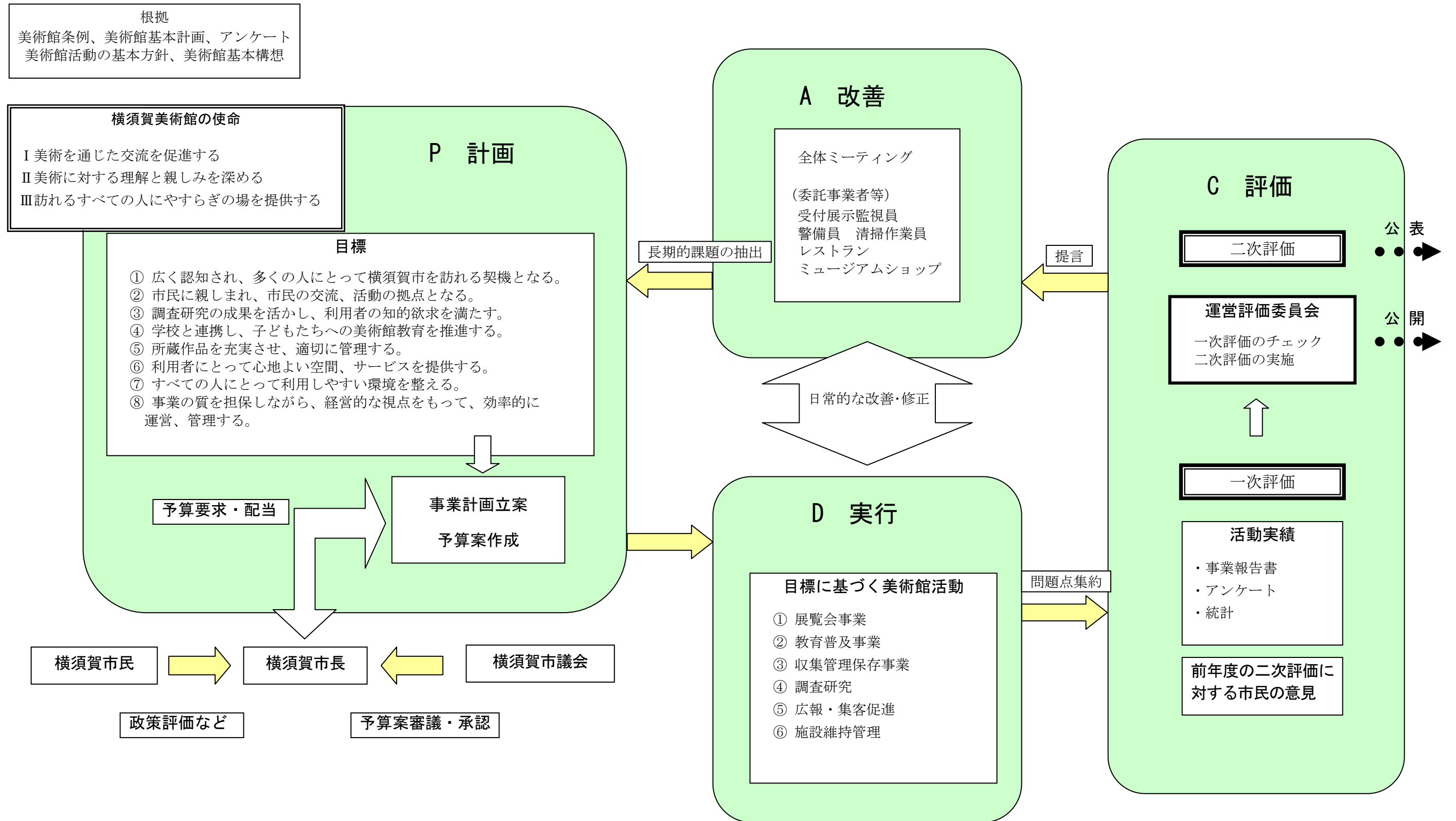
・専門的な知識が必要であるなどの理由から、評価ができないという場合のために「F」(判定不能)を設けた。

2 平成24年度の運営評価システム

使命	目標	指標	参考資料
I 美術を通じた交流を促進する 【集客・交流推進】			
① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。 〔広報〕			
達成目標	年間観覧者数103,000人	<ul style="list-style-type: none"> 年間観覧者数(月別推移、年度別推移) 年間来館者数(月別推移、年度別推移) 駐車場利用状況(月別推移、年度別推移) 来館回数(年度別推移) *リポート率 居住地域(年度別推移) *市民率 交通手段(年度別推移) 	
実施目標	広報、パブリシティ活動を通じて、市内外の広い層に美術館の魅力をアピールする。	<ul style="list-style-type: none"> 各種メディアへの掲載実績 広報会議の概要(広報戦略) 訴求活動の概要(ポスチラ配布、リリース発送の状況) 	
② 市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。 〔市民協働〕			
達成目標	市民ボランティア協働事業への参加者数のべ1,400人(事業ごとに加算、登録者・一般参加者を総合して)	<ul style="list-style-type: none"> 各事業ごとの開催回数、参加者数の一覧 →サボボラ研修 所蔵品展ギャラリートーク(参加者数、参加ボランティア数) 小学校鑑賞会補助(参加ボランティア数のみ) ワークショップ補助(参加ボランティア数のみ) プロジェクトボランティア会議 プロジェクトボランティアイベント(参加者数、参加ボランティア数) 	
実施目標	ふだん美術館に関心を持たない層を含めた市民が、美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。 市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア関連事業の概要 (ボランティアの感想・反応) 	
II 美術に対する理解と親しみを深める 【社会教育】			
③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。 〔展覧会・教育普及〕			
達成目標	企画展の満足度(補正值)80%	<ul style="list-style-type: none"> 各企画展の満足度 所蔵品展の満足度(年度別推移) 谷内六郎展の満足度(年度別推移) 	
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6本(児童生徒造形作品展を含む)の企画展を開催する。 所蔵品展・谷内六郎展を年間4本開催する。 大人の知的好奇心を満たし、美術への理解を深めるための教育普及事業を企画・実施する。 所蔵図書資料を充実させる。 多くの人が気軽に利用できるよう、図書室の環境を整える。 主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各企画展(児童生徒造形作品展を除く)の概要(ねらい、担当者の感想・反省点) 所蔵品展の概要(同) 谷内六郎展の概要(同) 講演会・アーティストトーク等の実施状況(同) 大人向けワークショップ等の実施状況(同) 図書室の概要(図書新規購入額・点数、寄贈図書の点数) 図書室の利用状況(利用者の月別推移、担当者の感想・反省点) 学芸員による論文、発表等 	
④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。 〔若年層への教育普及〕			
達成目標	中学生以下の年間観覧者数18,500人	<ul style="list-style-type: none"> 観覧者数の券種別内訳(月別推移、年度別推移) 子どもを対象とした教育普及事業の参加者数(のべ人数の年度別推移) 	
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> 学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。 学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。 子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。 鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒造形作品展の概要(担当者の感想・反省点)(学校側の反応) 小学校美術館鑑賞会の概要(実施内容、学校数、児童数、対応職員・ボランティア数、担当者の感想・反省点)(学校側の反応) 中学生のための美術鑑賞教室の概要(実施内容、担当者の感想・反省点)(生徒の感想) 子ども向けワークショップ等の実施状況 研修等の受入れ状況 	

⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。 [収集管理]	
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。 ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。 ・計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。 ・所蔵作品がひろく価値を認められ、他の美術館等が開催する企画展などに活用されている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・作品収集の状況 ・保管環境の状況 ・所蔵作品の修復状況 ・所蔵作品の貸出状況(件数、点数)
Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する [運営・管理]	
⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。 [メンテナンス・来館者サービス]	
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・館内アメニティ満足度90%以上 ・スタッフ対応の満足度80%以上
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・アメニティ関連各項目の満足度(年度別推移) →全般・館内印象・館内環境・休憩所・トイレ・清掃 ・スタッフ対応の満足度(年度別推移)
	<ul style="list-style-type: none"> ・メンテナンスの概要(屋外含む美観、安全性の確保) ・受付・展示監視員研修の状況 ・運営事業者連絡会議の概要(議題等) ・繁忙期の対策(ケータリング誘致など)のまとめ ・レストランアンケート結果 ・レストランコラボメニューの概要
⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。 [バリアフリー]	
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉関連事業への参加者数のべ400人
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・各事業ごとの開催回数、参加人数 →福祉関連講演会 福祉関連ワークショップ 福祉関連パフォーマンス 障害児を対象としたワークショップ 託児サービス
	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉関連講演会の概要 ・福祉関連ワークショップの概要 ・福祉関連パフォーマンスの概要 ・障害児を対象としたワークショップの概要 ・託児サービスの概要 ・養護学校等の受け入れ状況 ・鑑賞補助(対話鑑賞)の実施
⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する [経営的視点]	
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館全体で年間使用する電力量を前年比△5%とする。
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・電力使用状況一覧
	<ul style="list-style-type: none"> ・経費節減の事例・検討課題報告 →開館日・開館時間

横須賀美術館運営評価システムの全体像



3 平成 24 年度の運営評価結果

美術館による一次評価

I 美術を通じた交流を促進する

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	A

【達成目標】年間観覧者数 103,000 人

〔目標設定の理由〕

- ・「横須賀市立美術館 基本計画」（平成 12 年 6 月策定）では、他の公立美術館の実績を参考に、施設の規模、本市の人口などを勘案し、年間観覧者数を 10 万人と予測しました。
- ・今年度の目標は、予算時には 100,000 人を見込んでいましたが、過去 3 年（平成 21 年度～平成 23 年度）の観覧者数の平均が 102,585 人であることから 103,000 人としました。

年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度 (括弧内は、特別企画展込み※)
来館者数	224,729 人	231,826 人	224,109 人	242,229 人
観覧者数	98,738 人	100,033 人	108,985 人	97,535 人 (123,203 人)

※「70's 展」4/1-4/14 入場者数 5,920 人を除く。

〔一次評価の理由〕

- ・年間観覧者数は経済部が主体となって実施した企画を除き、103,000 人と目標設定しましたが、実績は 97,535 人で目標を下回ったため「B」評価としました。
- ・達成できなかった主な原因は、「国吉康雄展」に映画化の話が出ていたために、その話題性に期待していたが、映画化が延期となったために広報等で活用できなかったこと、また、「女性の情景展」の観覧者予測が甘かったことの 2 点と考えています。

展覧会名		観覧者予測	実績	達成率
企 画 展	正岡子規と美術展	3,500	3,466	99.03%
	国吉康雄展	16,000	13,309	83.18%
	ストラスブール美術館展	20,000	24,569	122.85%
	女性の情景展	16,000	10,327	64.54%
	朝井閑右衛門展	12,000	12,363	103.03%
	児童生徒造形作品展	15,000	14,090	93.93%
	日本の木のイス展	12,000	11,359	94.66%
所蔵品展		5,500	8,052	146.4%
合 計		100,000	97,535	97.54%

※「女性の情景展」の観覧者予測は、事業計画策定時の入力に誤りがあったため、予算編成時の予測に合わせ 18,000 人から 16,000 人へ下方修正いたしました。

[特別企画展の評価]

特別企画展	会期	目標数	入場者数	達成率
ラルク・アン・シエル展	H24.6.9-7.8	20,000人	23,226人	116.13%
70'ハイブレーション展	H25.3.16-4.14	20,000人	8,362人	41.81%
合計		40,000人	31,588人	78.97%

(全体的な印象)

- ・「ラルク・アン・シエル (LeC) 展」こそ目標を上回ったが、「70'ハイブレーション展」は、目標を大きく下回っており、集客を目的とした企画展としては、物足りない印象。

(試行により判明した課題)

- ・多くのお客さまが訪れた「ラルク・アン・シエル展」では、お手洗いや休憩所などが課題として浮き彫りになった。今後、集客促進を進めるのであれば、施設のキャパシティを考慮した検討が必要。
- ・また、「音」に対する苦情も多かったが、展示によるもの以上に、多くのお客さまが訪れたことによる影響のほうが大きかったと思われる。
- ・「70'ハイブレーション展」は、入場者数が少なかったこともあり、特に新たな課題が見つかるようなことはなかった。

(アンケート結果) サンプル数 LeC展：1631 70's展：551

満足度	満足	やや満足	普通	やや不満	不満
LeC展	48%	37%	11%	3%	1%
70's展	38%	45%	13%	3%	1%

性別	男性	女性
LeC展	11%	89%
70's展	53%	47%

年代	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
LeC展	0%	9%	49%	25%	13%	3%	1%	0%
70's展	0%	5%	8%	13%	27%	33%	12%	2%

居住地域	市内	県東部	県央	県西部	都内	その他
LeC展	5%	18%	6%	2%	28%	41%
70's展	32%	33%	9%	2%	17%	7%

来館回数	初めて	2回目	3回目	4-9回目	10回以上
LeC展	84%	11%	3%	2%	0%
70's展	62%	13%	7%	14%	4%

【実施目標】 広報、パブリシティ活動を通じて、市内外の広い層に美術館の魅力をアピールする。

【目標設定の理由】

- ・横須賀美術館は、企画展・所蔵品展の内容はもちろんのこと、その絶景のロケーションからも一度お越しいただければ、きっとご満足いただけるだけの魅力を持っていると考えています。当館の魅力は、本市の貴重な都市資源であり、これを有効活用することは、本市のシティセールスや交流都市の推進という観点からも重要になります。
- ・そのためには、市内外に積極的に情報を発信して広い層に美術館の魅力をアピールすることで知名度や認知度を向上させていくことが必要と考え、実施目標として設定しました。
- ・数値としては、過去3年（平成21年度～平成23年度）の無料での情報掲載数の平均が182件であることから200件を目標としました。

媒体	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
新聞	10件	40件	46件	50件
美術系雑誌	43件	38件	37件	26件
タウン紙	34件	20件	28件	31件
フリーペーパー		18件	6件	4件
情報誌（地域版）		5件	4件	6件
情報誌（全国版）		21件	18件	19件
WEB	24件	15件	30件	40件
ファッション誌	4件	11件	6件	11件
機関紙（会員誌）	25件	13件	12件	13件
その他		8件	12件	7件
合計	161件	186件	200件	207件

【一次評価の理由】

- ・新聞、雑誌等の無料での情報掲載数は207件となり、目標を達成しました。
- ・有料での広報は次のとおり展開しました。
 - 京急線窓上及び主要駅（30駅）へのポスター掲出
 - 「ストラスブール美術館展」タウンニュースへの広告掲出、ポスティング
 - 「関野宏子展」幼稚園協会誌広告掲出
 - 「女性の情景展」JR大船駅、鎌倉駅、北鎌倉駅、逗子駅へのポスター掲出
 - 「朝井閑右衛門展」JR鎌倉駅、逗子駅、戸塚駅、大船駅へのポスター掲出
 - 「日本の木のイス展」雑誌広告掲出

- ・その他、以下のとおり広報活動を行いました。
 - 広報よこすかへの毎月の展覧会情報、美術館のイベント等の掲載
 - 市内施設（各行政センター、役所屋等）へのポスター、チラシの配布
 - 京浜急行線近隣各駅へのチラシの配架（市内全駅、及び三浦海岸駅）
 - 宿泊施設や周辺観光施設へのポスター、チラシの配架
 - 福利厚生団体や宿泊施設と提携し、割引契約の締結
 - 市内外のイベント（カレーフェスティバル、日産スタジアムでの横浜F・マリノス戦等）への美術館ブースの出店
 - コンサートの開催
- ・新たな情報発信のツールとして、平成24年10月から美術館公式ツイッターの運用を開始しました。約5か月でフォロワー数が500人を上回りました。
- ・今後は、昨年度に引き続き、認知度の向上やイメージアップのため、市内外のイベント会場での広報活動や、ニュース記事となるための自発的な話題づくりが必要と考えます。
- ・特に課題として、団体集客の推進、商業撮影の誘致活動の実施、フェイスブックの導入の検討、インバウンドの研究などを進めて行く予定です。

② 市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
S	A

【達成目標】市民ボランティア協働事業への参加者数のべ1,400人
(事業ごとに加算、登録者・一般参加者を総合して)

〔目標設定の理由〕

- 参加者数は「活動が活発に行われているか」「魅力的な活動を企画しているか」をはかるための指標の1つとなります。
- 今年度の目標は、過去3年（平成21年度～平成23年度）の参加者数の平均が1,312人であることから1,400人としました。

〔一次評価の理由〕

- 24年度ののべ参加者数は2,075人となり、目標を大きく上回りました。

(市民ボランティア協働事業への参加者数)

	プロジェクトボランティア		サポートボランティア		計
	登録者	一般参加者	登録者	一般参加者	
平成21年度	115	466	443	254	1,278
平成22年度	91	580	375	174	1,220
平成23年度	197	533	434	274	1,438
平成24年度	258	1,116	392	309	2,075

プロジェクトボランティア

- 美術館のイメージアップと美術館の利用を高めるため、自らイベントを企画実施するボランティア。
- 主な活動は、市民等が参加し楽しめるボランティアイベントの開催。登録者数43名（平成25年3月末現在）

サポートボランティア

- 美術館が主催する活動を共感し、自身の知的欲求を充足しつつ美術館活動をサポートするボランティア。主な活動は、ギャラリートークの実施。ワークショップや鑑賞会の補助。登録者数30名（平成25年3月末現在）

〈プロジェクトボランティア〉

- ・開催時期や、海の広場の立地条件を考慮した企画が、たくさんの人が集まるイベントの魅力につながっています。
- ・24年度は、年3回（ゴールデンウィーク、夏、冬）イベントを実施しました。
- ・GW・夏のイベントが自由参加型だったため、昨年度に比べて、一般の参加者数が倍増する結果となりました。
- ・企画側が経験値を積み、小さな子どもでも参加できる内容の工夫や、気軽に参加しやすい運営方法を取り入れたことが、参加者数の増加につながっています。
- ・季節を問わず、海の広場を用いたイベントについては、市内の子どもを持つ家庭に定評があり、すでに恒例行事として定着していると考えられます。

〈サポートボランティア〉

- ・経済部イベント実施のために所蔵品展ギャラリートークの開催回数が減少（48回→42回）したにも関わらず、一般の参加者数は増加しています。
- ・鑑賞サポートボランティアの第3期生を募集し、7名の応募がありました。
- ・障害児者ワークショップ「みんなのアトリエ」の補助に対しては希望者が多く、このしごとのみを希望する人もいます。ワークショップの性質上、同時に参加できる人数には限りがありますが、できるだけ多くの方に参加していただけるよう調整を行っています。

【実施目標】ふだん美術館に関心を持たない層を含めた市民が、美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。
市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。

【目標設定の理由】

市民感覚を持ったボランティアと協働することにより、市民にとって親しみやすい美術館により近づくことができます。また、美術館への親しみ、愛着を持ったボランティアの方々を架け橋として、より広い層の市民に美術館の魅力を知っていただく機会を増やしたいと考えています。

横須賀美術館のボランティア活動は労働ではなく、美術館の担うべき社会教育の一環です。ボランティアがそれぞれの創意と経験を活かし、仲間どうし協力し、美術館ならではの活動をしていくこと、そして、やがてそれが地域の新しいコミュニティとなることを期待しています。

【一次評価の理由】

〈プロジェクトボランティア〉

- ・「だれでもやることができる」「フリーで来ても参加できる」「美術館を活かした活動をする」という点に留意しながら、ゴールデンウィーク、夏休み、クリスマスに近い時期に、ボランティア自身が発案し運営するイベントを行っています。それぞれ

のイベントは地域の行事としてすでに定着し、市民を中心に多くの方が参加しています。

- ・GW のイベント（キャンパスのトンネル）では、布を張るための足場の組み立てについて、専門の業者に業務委託しました。外部委託の予算がついたことによって、実現できることの幅が広がり、ボランティア側の満足にもつながっています。
- ・イベントの参加者、特に子どもたちと交流を持つことが、企画するボランティアのやりがい、喜びの大きな要因となっています。
- ・活動に興味を持ち、企画段階から主体的に参加するボランティアが増えています。
- ・当日ボランティアを中心に、若い世代の参加者が増えています。
- ・イベントの運営について経験値が高まっており、準備や当日の進行がよりスムーズに行われるようになっています。

〈サポートボランティア〉

- ・研修を月 2 回実施し、サポートボランティアとして活動するために必要な知識とスキルの向上に努めています。
- ・第 3 期生に対する研修を 1 月から開始しました。さまざまな研修を経て、25 年 7 月ごろからは他のボランティアと同じように活動をしていただく予定です。
- ・研修の一環として、他の美術館や作家のアトリエを訪問するツアーを実施しました。24 年度は、カスヤの森現代美術館、滝波重人アトリエ、朝井閑右衛門アトリエ跡などを訪問しました。こうした活動は、ボランティアならではの経験として、たいへん好評をいただいています。
- ・研修では、それぞれの企画展について、担当学芸員によるレクチャーを行っています。
- ・昨年度、交流の機会をもった川崎市市民ミュージアムのボランティアの皆さんと、情報交換をしています。
- ・ギャラリートークでは、当日の担当者間で取り扱う作品を分担し、それぞれ工夫した個性的なトークを展開しています。
- ・小学校美術館鑑賞会では、以前は 1 グループの引率には必ず学芸員 1 名を充て、ボランティアの方にはその補助をお願いしていましたが、今年度からは、学芸員の担当は各校 1 名とし、一部のグループの引率について、ボランティアの方にお任せすることとしました。負担は大きくなりましたが、責任感とやりがいをもって取り組んでいただいていると認識しています。
- ・障害児を対象としたワークショップ「みんなのアトリエ」の補助は、特に希望する人が増えています。

【課題への取り組み】

〔一次評価で掲げた課題〕

- ・鑑賞サポートボランティアについては、第 3 期の募集を行う。
→鑑賞サポートボランティアの第 3 期募集を行い、7 人の応募がありました。
- ・プロジェクトボランティアについては、引き続き新規募集を行い、活動への定着率

を高めるよう努力する。

→イベントごとに当日ボランティアを募集、また、チラシを配布するなどして、新規募集につとめています。入れ替わりはあるものの、新たに継続的に参加する人も増えています。

- ・新たなボランティア活動の展開を検討する。

→ボランティアの方のご意見をうかがいながら、ひきつづき検討しています。

[二次評価で指摘された課題]

- ・プロジェクトボランティア登録 19 名、サポートボランティア登録 28 名であるが、さらに登録者を増やすための広報活動と、研修の充実をお願いしたい。
→今年度末時点での登録者数は、プロジェクトボランティア 43 名、サポートボランティア 30 名となりました。それぞれの方のご事情によって、活動の粗密や、入れ替わりがあるものの、全体としてはやや拡大する傾向にあるといえます。ひきつづき広報活動と研修の充実につとめてまいります。
- ・小学校 6 年生を対象とした美術館鑑賞会は、児童に美術を通して豊かな感性を育ませると共に、美術館に足を運ぶきっかけとなっている。今後も充実した取り組みをお願いしたい。
→特に児童数の多い学校では、すべての児童に目配りをするのが難しく、ボランティアの方の助けが重要となります。児童にとっても、ボランティアの方にとっても楽しく、充実した経験となるように注意して取り組んでいます。
- ・サポートボランティアが活動の際、揃いの T シャツなどを着用すると、士気を鼓舞し、達成感を促す効果を生むのではないだろうか。
→検討しましたが、実施には至りませんでした。

【次年度への課題】

- ・プロジェクトボランティアについて、新規参加者の定着をはかります。
- ・情報発信のあり方を検討します。
- ・研修を通じて、サポートボランティアの能力のさらなる向上を目指します。

Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 企画展の満足度（補正值）80%

〔目標設定の理由〕

展覧会を企画・実施することは、美術館にとって基本的な活動のひとつであり、中でも、年間6回開催している企画展は、波及効果が高く、最も力を注ぐべき事業といえます。こうした認識から、企画展に対する来館者の満足度を、美術館の社会教育機能の高さを示す目安の代表として掲げることとしました。

満足度は来館者へのアンケートによって算出しています。同じ方法の調査を継続的に行っており、過去3年（平成21年度～平成23年度）の平均が77.5%であることから80%と設定しました。

年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
企画展満足度	70.5%	76.0%	73.2%	78.7%	80.6%	80.9%

〔一次評価の理由〕

目標の80%を達成することができました。数値を年度別に比較すると、過去のどの年度よりも上回っています。「児童生徒造形作品展」を除き、3つの展覧会が80%の満足度を超えています。

企画展別にみると、「国吉康雄展」は、福武コレクションと岡山県立美術館のコレクションを中心に構成。根強いファンが多く、展示への期待や作品に対する満足度の高さが全体の満足度を上げていると考えられます。

「ストラスブール美術館展」は、フランスのストラスブール美術館のコレクションを中心とした近代美術展。ピカソ、ゴーギャン、シャガールといったモダンマスターへの関心の強さが満足度を上げたと思われます。市民割引も功奏し、市民率が高いことも特徴の一つです。

「女性の情景展」は、日本画、洋画、現代美術、雑誌など幅広いジャンルより作品選択を行いました。女性やファッションというなじみ深い題材から、女性を中心に高い満足度を得られたと考えます。

「朝井閑右衛門」展は没後30年を機に開催。美術館での久々の個展であること、横

須賀美術館開館のきっかけとなった重要なコレクションを用いた展示であることなどへの期待が、全体の満足度を上げていると考えられます。

「日本の木のイス展」は、展覧会として取り上げられることの少ない、インテリアデザインの分野に焦点をあてた展覧会です。デザインや建築に対する関心の高い20歳～30歳代に波及したことが、一定レベルの満足度を導いたと考えられます。一方で、日本の作例に絞ったことを惜しむ声も聞かれました。

毎年恒例となっている「児童生徒造形作品展」の観覧者の多くは出品された子どもたちの関係者であり、内容を批判する要素に乏しいことから、他の企画展と満足度を比較するには注意が必要です。年度ごとの「企画展満足度」を算出する際には、それぞれの企画展の観覧者数の比率を反映させています。

【実施目標】

- ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6本（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。
- ・所蔵品展・谷内六郎展を年間4本開催する。
- ・大人の知的好奇心を満たし、美術への理解を深めるための教育普及事業を企画・実施する。
- ・所蔵図書資料を充実させる。
- ・多くの人が気軽に利用できるよう、図書室の環境を整える。
- ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。

【目標設定の理由】

社会教育機関としての美術館は、常に知的好奇心を満足させる事業を発信し、また、そのための環境を整えていかななくてはなりません。

美術として扱うべき領域はとても広く、利用者の幅広い興味に応えるためには、所蔵品展以外にもさまざまなテーマを設けた企画展を開催する必要があります。作品の借用が許される期間に限度があることなどを考慮し、1カ月半から2カ月程度を目安とした年間6本の企画展を計画・開催しています。

また、コレクションの魅力を紹介するために、所蔵品展および谷内六郎展を年間4本開催しています。

さらに、横須賀美術館では、美術への親しみ、理解を深めるために、講演会やワークショップなど、年間を通じてさまざまな教育普及事業を展開しています。子どもたち、あるいは障害のある方など、対象を限定したものについては別項にゆずり、ここでは、広く一般向けの教育普及事業について、評価の対象とします。

これらの事業を企画・実施するための基礎となっているのが、日々の調査研究です。その範囲は、所蔵作品に関することを中心に、広く美術に関すること、美術の教育普及に関することを含んでいます。

〔一次評価の理由〕

24年度の企画展は、日本近代美術の作家の個展、海外展、所蔵作品を生かした、横須賀ゆかりの作家の個展、絵画以外の領域で関心の高いデザイン展、など多岐にわたっていました。

「国吉康雄展」は、美術史的な評価は高いものの、一般的な知名度は必ずしも高くないこの作家について、人物の魅力が伝わることを心がけました。読みやすさを重視したガイドブックを発行、また、アメリカで活躍したことが伝わるよう自筆の英語の文章を読解するワークショップを開催、さらに子ども向けの鑑賞ガイドを充実させるなど、工夫を重ねました。

「ストラスブール美術館展」では、フランス北東部のアルザス地域圏の都市ストラスブールにある近現代美術のコレクションを中心に、19世紀後半から20世紀後半の間に活躍した59作家83点の作品を紹介し、近現代ヨーロッパ美術の軌跡をたどりました。

「女性の情景展」は主題としてしばしば描かれる女性像を、「物語・歴史にみる女性」「モダンガール」「画家とモデル」「現代と女性」の4章に分け、洋画、日本画、雑誌や写真など様々な媒体から作品選択をしました。また、まんがコーナーを設け、手にとって読めるスペースを作りました。

朝井閑右衛門は、戦後20年の間横須賀市内の田浦に住んでいた横須賀ゆかりの画家です。「朝井閑右衛門展」では、横須賀美術館コレクションの中核ともなっている朝井閑右衛門作品を軸とし、各地に散在している代表作を集めて、改めて画業の全貌に迫りました。

「日本の木のイス展」は、時系列に配慮して展示作品を選び、インテリアデザインの歴史を大まかにたどれるよう配慮しました。加えて、地域の作家や産業にも目を向け、横須賀の作家や横浜のメーカーの協力のもと、実際に座ることのできるコーナーを設置。見るだけでなく体験型の展示を取り入れることで、観覧者が主体的に楽しめる空間が生まれました。また、生涯学習財団と連携し、市民大学の講座の一環としてナイトツアーを実施しました。“貸し切り”に近い状態での鑑賞で、参加者と学芸員とのじゅうぶんなコミュニケーションのもとで鑑賞ができました。

所蔵品展では、会期ごとに特集を組み借用作品も加えて、より魅力のある展示となるよう努めました。結果的に小企画展を行ったこととなり、総合で満足度が75.4%と昨年度より10%近く上がっています。

第1期では、「横須賀・三浦半島の作家たち」と題し、当館が収集してきた横須賀・三浦半島の作家の作品に加え、五島三子男、川田祐子、土屋仁応らの作品を特集展示しました。

第2期では、「ニョロの森ー関野宏子の世界」と題した特集展示を行いました。関連企画として、プレ公開＋共同制作やワークショップを開催。作家の作品に加えて、参加者が制作した作品も展示しました。参加体験型の展示を行うことで、子供たちが美術館をより楽しめる工夫を施した展覧会でした。また、展示に併せて小冊子を発行しました。

第3期では、展示スペースの後半部分を使い、特集展示として「及川正通—イラストレーションの世界展」を開催しました。1970年代から最終号までの『ぴあ』の表紙絵約200点を中心に、及川氏の画業だけでなく70年代以降の日本の文化史を追体験できる構成を心がけ、観覧者が共感できる展示となるよう配慮しました。

第4期では「指先・ことばでつむぐ美術」と題し、視覚に障害のある人の美術鑑賞について考えるための展示を行いました。ふだんは触ることのできない彫刻作品について、学芸員のナビゲートのもとに触ってみる機会を設け、また、一部の絵画作品について「触察図」を用意しました。

谷内六郎館では、所蔵品展の会期と連動して、年4回の展示替えを行っています。会期ごとに、週刊新潮の1年分に当たる表紙絵およそ50点を順を追って展示しており、24年度は、1980年から1981年の表紙絵を展示したことで、開館以来、すべての表紙絵を一通り展示いたしました。第3期では「谷内六郎と海」、4期では「子どもの遊び」とテーマを立てて、展示をしました。

24年度の教育普及事業（一般向け）を一覧すると、下表のようになります。

いずれも規模は大きくありませんが、入念な準備によって、それぞれ充実した内容となっています。参加者と講師、主催者の距離が近く、より密なコミュニケーションが可能であることは、事業効果の高さにつながっています。

講演会・アーティストトーク

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
画家ヤスオ・クニヨシの生涯	5月19日	五十嵐匠(映画監督) 丸内敏治(脚本家)	70	—	40
ボンジュール、ストラスブール —その歴史と文化	8月4日	宇京頼三(三重大学名誉 教授)	70	—	43
関野宏子アーティストトーク	8月25日	関野宏子(出品作家)	70	—	25
装いから読み解くモダン美人 —時代を映す、時代を開く	10月6日	児島薫(実践女子大学美 学美術史科教授)	70	—	13
田浦の朝井閑右衛門	12月1日	原田光(岩手県立美術館 館長)	70	—	38
対談・昭和の子ども —暮らしと遊び	3月2日	南伸坊(作家・イラストレ ーター) 小泉和子(昭和の暮らし 博物館館長)	70	—	26
公開インタビュー: バタフライ・スツールの製作	3月9日	深瀬行正(株式会社天童 木工ホームユース事業部 部長)	70	—	35

展覧会関連ワークショップ

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
挑戦！英語で美術鑑賞	5月20日	ブライアン・ アムスタッツ(翻訳家)	24	34	24
閑さんのアトリエ探訪	11月23日	当館学芸員	20	23	20
つくってあそぼう！ マイおてだま	3月2日	前潟由美子 (昭和の暮らし博物館)	20	15	15
1/5スケールでつくる ミニチュア・イス	3月3日	白倉祥充(出品作家)	32	38	32
木のバターナイフをつくろう	3月10日	神永匡崇(出品作家)	32	36	32

オトナ・ワークショップ

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
組む、編む:バスケットリーの 世界から	5月26日	高宮紀子 (バスケットリー作家)	12	44	12
	5月27日		12	51	12

映画上映会

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
冬のシネマパーティー 『四つのいのち』	2月2日	キノ・イグルー (シネクラブ)	25	29	23
	2月3日		25	25	21

企画展・谷内六郎展に関連して、6回の講演会と、4回のワークショップを行いました。

ワークショップは、子どもを対象に行うケースも多いのですが、当館では特に大人の方を対象として「オトナ・ワークショップ」を例年開催しています。24年度は、バスケットリー（かご編み）のワークショップを行いました。

映画上映会は、「シネマパーティー」として恒例化しているイベントです。

それぞれの事業の基礎には調査研究があり、その成果の一部は企画展カタログをはじめ種々の印刷物等で発表しています。

図書室では、定期購読雑誌や作品集をはじめ、美術史・デザイン・建築・写真など、幅広い分野での美術図書、自館で開催する展覧会に関連する資料、児童書や絵本などの収集に努めています。また、気軽に入ってこられ、のんびり過ごすことのできる環

境づくりの工夫を重ねています。認知度向上のための取り組みも一定の成果につながっています。

【前年度の課題】

- ・解説などの工夫に加え、資料の調査・展示の充実をはかる。その成果は図録に反映させ、学芸員が論文を書く。
- 国吉康雄展では、既に数多くカタログが発行されていることを念頭に置き、持ち運びしやすいサイズで、図版は入れつつ、読み物的な内容の充実したカタログを学芸員が製作。好評を博しました。女性展では文学系の資料や写真、雑誌の紹介にも力を入れ展覧会、カタログの充実を目指しました。朝井展では、当館にとって重要であり、所蔵作品も多い朝井閑右衛門の新発見の資料展示や、さらに多くの資料を撮影し、映像で流すという試みも行いました。木のイス展では、地域の作家の掘り起こしや、建築に関連する初出資料の紹介もし、充実した展示となりました。
- ・幅広いテーマおよび観客を想定し、コンセプトを明快にした質の高い展覧会及び教育普及事業を開催する。
- 海外展や近代美術の作家の個展などを行うと同時に、同時期に開催している所蔵品展において、親子向けの展示や、横須賀ゆかりの作家の紹介、展示などを行い、年間を通じて幅広い層の観客を想定した展示を開催いたしました。
- ・図書室の情報発信の充実
- まずは図書室の存在の周知に努めました。館内壁への追加サインが完成し、図書室までの動線が強化されました。利用者数は増加傾向にあります。
『図書室の利用案内』ファイルを作成し、展示室内にあるベンチに置いています。ファイルの内容は、開室時間の案内や企画展関連資料や所蔵資料の紹介などで、定期的に入れ替えるようにしています。展覧会後に図書室まで足を運んでくれる利用者が増えました。
展覧会毎に配架を替えている『展覧会関連図書コーナー』にアイキャッチャー(書架見出し)をつけました。また、配架の入れ替えを行ったことを HP 上で告知するようにしました。

【前年度二次評価における指摘事項への取り組み】

- ・アンケートのサンプル母数を増やしていくことが課題ではないか。
- 来館者に対するアンケート回収数の比率は、21 年度には 0.8%であったものが漸減し、24 年度には 0.6%強となりました。実数では 1483 件であり、少なくない数と考えています。今後は、減少傾向が続かないよう、年間 1500 件をひとつの目安として維持してまいります。具体的には、来館者が比較的多い日に、一定の時間に限り全員に配布するなど、作為的とならないように注意しながら、回答をお願いしていきます。

- ・音声ガイドやワークシートの活用など知的好奇心を満足させるためのアイテムの工夫を今後も検討してほしい。

→国吉展では、来館の多いGWに作品について理解を深めてもらうための子どもセルフガイドを配布。答えた子どもたちには国吉のぬりえとパズルをプレゼントしました。ストラブール展においては、昨年に引き続き音声ガイドを行い、鑑賞ガイドも作成、配布いたしました。今後も、展覧会において好奇心を満足させるための方法を様々に検討していきたいと考えます。

- ・図書室の利用の便を図るためには駐車料の減免処置が必要である。1時間程度の無料化の検討をお願いしたい。また、夏休み期間中の利用者数が多い。学生が夏季課題のレポート作成等に利用するのであれば一部資料の貸し出しも検討してほしい。

→駐車場の減免処置は美術館の施設を有償で利用した人へのサービスであり、無料で利用できる図書室は対象外と考えています。

→美術館に併設の美術図書館と通常の図書館とは役割が異なります。美術図書館では、資料が常に在庫状態にあり、その場で閲覧、調査できることに意味があります。また、通常の販売ルートに乗らない展覧会図録や現在では入手不可の古書などは希少価値が非常に高いものです。貸出しによって紛失や破損の事故が起きることは避けなければなりません。かわりに、資料が必要な方のためにコピー機を置き、コピーし、持ち帰りができる機能をもたせています。

- ・展覧会関連のワークショップで、終了時に参加者の感想やアンケートの実施はなされているか。また、その内容から毎回ワークショップの費用対効果を考察すべき。

→ワークショップは、現場の様子からも、また過去のアンケート実績からも、全般に、参加者の満足度が常に一定レベルに達しているものと推測できます。このため、近年は、参加者の満足度を知る目的ではなく、時間配分や手法、難易度など、おもにプログラムの有効性を検証するためにアンケートを行っています。具体的には、新しい傾向のワークショップを行う場合などに限定し、アンケートを実施しています。

→24年度まで、ワークショップは原則として参加費無料として実施してきましたが、「受益者負担」の観点から、25年度以降は、成人向けワークショップの一部において参加費を徴収することとしました。少人数に対する事業について、少額でも歳入を得ることにより、事業の費用対効果は向上します。そのいっぽう、費用を負担する参加者からは、よりいっそう、高い質を求められることとなります。

④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 中学生以下の年間観覧者数 18,500 人

〔目標設定の理由〕

子どもたちが美術館に親しみを持ち、利用しやすくするためのさまざまな取り組みをしていますが、その成否は、実際の観覧者数に反映されるはずですが、今年度の目標は、過去3年（平成21年度～平成23年度）の観覧者数の平均が18,064人であることから18,500人と設定しました。

〔一次評価の理由〕

24年度の年間観覧者数は19,496人となり、目標を達成しました。

（中学生以下の観覧者数）

	幼児	小学生	中学生	計
平成21年度	1,706	10,981	2,252	14,939
平成22年度	3,074	10,418	2,941	16,433
平成23年度	4,041	14,442	4,285	22,768
平成24年度	4,314	11,301	3,881	19,496

若年層に配慮した事業と、そのPR計画の成功が、目標達成につながっています。

特に、7～8月の夏休み中に開催した「ストラスブール美術館」展では、市内の小中学校を通して全児童にチラシ配布したことが効果をあげたと考えられます。

また、子供向けワークショップや児童生徒造形作品の開催等によって、小・中学生の造形活動を支援しています。

鑑賞の面では、24年度からの新たな取り組みとして、①すべての企画展で親子向けの展示案内（親子ツアー）を実施、②全市立保育園と連携し、出前授業を含む鑑賞プログラムを園ごとに実施、③小学校鑑賞会の充実に向けた、鑑賞会内容および教材開発のための教員との勉強会に参加、以上3つに着手しています。幼児の観覧者数の増加は、上記①②の成果が確実に反映しているものと見ています。

いっぽうで、「トリック&ユーモア展」、「集まれ！おもしろどうぶつ展」のような、子どもたちへの波及効果が高い展覧会のあった23年度に比べると、小中学生の観覧者数は2割程度減少していますが、過去数年度を眺めると増加傾向にあります。

経済部主導による集客イベントを開催するため、およそ2ヶ月の間、所蔵品展が空白

となったことについては、美術館を利用する学校団体から厳しい指摘をいただいております、今後の展覧会構成を考える上で考慮すべき要件と考えます。

【実施目標】

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
- ・学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
- ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。

【目標設定の理由】

美術教育は表現と鑑賞との両輪によってなりたつものですが、多くの学校教育現場では鑑賞の機会に乏しく、造形教育に偏りがちでした。

近年の年度にわたる学習指導要領の改訂にともなって、小・中学校における鑑賞教育がより重視されるようになってきています。23年度から実施された小学校の新学習指導要領では、鑑賞教育のために地域の美術館を利用することに加え、学校と美術館との連携を図ることが明示されています。

学校教育ではできない、美術館にしかできないことは何かをじゅうぶん意識しながら、鑑賞教室やワークショップ、作家との連携等充実したプログラムを企画、提供することによって、子どもたちが美術に親しみをもつ機会の拡充につとめていきたいと考えています。

【一次評価の理由】

- ・開館2年目の20年度から、市内の子どもたちの作品を一堂に展示する「児童生徒造形作品展」の会場となっています。学校・幼稚園と緊密に連携しながら、運営にあたっています。
- ・市内の全47小学校の6年生を対象として、「美術館鑑賞会」を実施しています。対応には学芸員と鑑賞サポートボランティアが複数であり、ワークシートなどを利用して、鑑賞の楽しさを知ってもらえるよう努力しています。受け入れ側が経験を積むことによって、鑑賞内容も充実に向かっていきます。
- ・市外や私立の小・中学校団体に対しても、事前の相談を経て、注意事項についての話やワークシートの提供を行うことがあります。
- ・夏休みの時期にあわせ、「中学生のための美術鑑賞教室」を実施しています。参加は任意ですが、広報する地域を拡げたため、市外中学生の割合も増えています。
- ・「アーティストと出会う会」では、会場に作品を持ち込み、講師を囲んで、現在までの道のりや夢に向かう姿勢を語るかたちが人気を呼んでいます。
- ・子どもを対象とした普及事業に積極的に取り組んでいます。ワークショップをはじめとした造形活動のほか、野外映画会や、親子向けのギャラリートourなど、さまざまな方向性から、幅広く美術を楽しむ機会を設けています。

- ・鑑賞支援活動については、対象となる年齢層の幅を広げています。親子向けのギャラリーツアーを企画展ごとに実施したほか、市の保育課と連携し、市立保育園全 10 園に対し、出前授業と来館時の鑑賞プログラムを実施しました。

【次年度への課題】

- ・教員との勉強会を通じて教員との協力関係を強化し、鑑賞教材の研究や小学校鑑賞会の事前授業の試行など具体的な活動に取り組みます。
- ・保育園、養護学校、支援学級などを視野に入れ、対象に即したきめ細やかな鑑賞プログラムを実施します。

⑤ 所蔵作品を充実させ、適切に管理する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
—	C

【達成目標】(なし)

〔目標設定の理由〕

購入費（基金）が充当されていないため、収集は寄贈に頼っている状況です。

寄贈される作品の質については、専門家による外部委員会である「美術品評価委員会」によってすでに保証されていますが、作品の収集は数量によって評価されるべきではありません。

作品の修復、額装等の処置についても、個々の事例に即して対処しているため、やはり数量的な評価に適していません。

作品の貸出は、依頼に応じて行う性格のものであり、また、作品保護の観点からも数量的な評価をすべきではないと考えます。

したがって、この項目では達成目標を設定しません。

【実施目標】

- ・ 収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。
 - ・ 適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。
 - ・ 計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。
 - ・ 所蔵作品がひろく価値を認められ、他の美術館等が開催する企画展などに活用されている。
-

〔目標設定の理由〕

すぐれた美術作品をひろく収集し、次世代に伝えてゆくことは、美術館の果たすべき基本的な役割です。そのために、保管のための適切な環境整備と、作品そのものの修復および保護を行っています。他の機関での展示等の所蔵品の活用は、作品への影響をじゅうぶんに考慮したうえ、可能な範囲で行っています。

〔一次評価の理由〕

20年度以降、毎年50点を超える作品を受け入れています。24年度は寄贈64点を受入れました。作家本人、遺族からのご寄贈の場合、展示で活用してゆくために修復、額装が必要であるケースがほとんどです。また、短期間で多くの作品を寄贈によって受け入れることには、長期的にみたときに、コレクションのバランスを崩してしまう

おそれもあります。今後このようなペースで作品を受け入れ続けることは困難であり、より慎重な作品収集を行うべきと考えます。

なお、24年度の朝井閑右衛門展の開催に合わせ、朝井作品の購入予算を要求しましたが、最終的に予算が付かなかったため、購入することはできませんでした。

収蔵庫・保管庫について、昆虫類、菌類、気相についての調査（環境調査）を年度内に2回実施し、大きな問題のないことを確認しています。開館以来継続的に行っていることには、環境の長期的な変化を観察する意味があります。なお、今年度は特に、図書室の閉架書庫について、昆虫類と菌類についての調査を実施しました。

修復、額装は、企画展を開催するにあたり所蔵する朝井閑右衛門作品を集中的に行いました。また、近年の寄贈作品を中心に、必要な修復、額装を行っているほか、既存の作品でも画面への映り込みがはなはだしいものについては、アクリルやガラスを外して額縁改修を行うなど見直しを進めています。

所蔵作品の活用について、所蔵作品のうち14件（寄託作品を含む。）を他機関に貸し出しました。その中には初の海外貸出となるニューヨーク近代美術館への貸出も含まれています。この実績は、ある時期の美術の特色を映し出すすぐれた作品や、作家の画業を振り返る上で重要な作品が当館のコレクションに含まれていることを示しているといえます。件数から見ても、21年度実績の16件、22年度実績の12件、23年度実績の18件と同程度といえます。

以上により、例年並みの活動をしているといえますが、作品購入費の充当が途絶えている状況が解消されていないことから、一次評価を「C」としました。

【次年度への課題】

- ・ 作品購入の必要性を説明していくと共に、財源についても一層の検討を進め、たとえ少額でも作品購入費が予算配当されるよう引き続き努力してまいります。
- ・ 収集作品を精選します。
- ・ 貸出作品の偏りを減らすため、所蔵作品の活用と周知に努めます。

Ⅲ 訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

⑥ 利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	B

【達成目標】 館内アメニティ満足度 90%以上
スタッフ対応の満足度 80%以上

〔目標設定の理由〕

館内アメニティ満足度については、来館者が気持ちのよい時間を過ごしていることを示す指標であると考えます。21年度から、アンケートのなかに質問事項を加え、「全体的にみて、館内では気持ちよく過ごすことができた」に対する満足度を指標（総合満足度）としました。24年度の目標は、過去3年間（21年度～23年度）の満足度の平均である89.2%を上回る90%としました。

スタッフ対応の満足度については、来館者アンケート「スタッフの対応・案内は適切だった」に対する満足度であり、過去3年間（21年度～23年度）の満足度の平均が78.5%であることから、80%としました。

〔一次評価の理由〕

館内アメニティ満足度、スタッフ対応の満足度は同水準で推移していますが、目標には到達できませんでしたので、B評価とします。

目標を達成できなかった理由としては、経済部主催のもとに開催した特別企画展と美術館の企画展とを同時期に開催したことによって大勢のお客様が訪れてくださり、エントランス、トイレなどが混みあったこと、「音」が響いて静かに鑑賞したいお客様のご迷惑になってしまったことなどが影響していると考えています。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
館内アメニティ満足度	88.7%	88.5%	90.4%	87.6%
スタッフ対応の満足度	79.0%	78.0%	78.5%	79.1%

【実施目標】

- ・ 建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。
 - ・ 受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。
 - ・ 受託事業者と協力して、付帯施設（レストランおよびミュージアムショップ）を来館者ニーズに応じて運営する。
-

【目標設定の理由】

横須賀美術館が来館者に好ましい印象を持たれている大きな要因として、周囲の豊かな自然と、その風景と調和したユニークな建物があります。しかし、海のそばに立地していることから、強い風雨にさらされることも多く、また塩害によって老朽化の速度が進んでいることも事実です。建築の魅力をいつまでも来館者に伝えていくためには、適切なメンテナンス、清掃を継続していくことが重要となります。

さらに、ご案内をするスタッフの対応いかんによって、美術館に対する印象は大きく左右されます。受付・展示監視スタッフは受託事業者ですが、市職員との緊密な連携を図り、一体となって、来館者の立場に立ったより良い接客を目指します。

美術館体験のなかで、買い物や食事をすることも、来館者の大きな楽しみです。やはり民間事業者であるレストランおよびミュージアムショップと連携し、来館者のニーズに即応したサービスの提供がなされるよう、知恵を出し合い、工夫を重ねていきます。

【一次評価の理由】

(メンテナンス)

- ・ 錆が発生し美観を損ねていた海側の庇とサッシュを、錆落とし及び再塗装しました。
- ・ 塩害による劣化が進行していた屋外ベンチ 2 基の撤去と、41 基の補修及び再塗装を実施しました。
- ・ 来館者の安全を図るため、美術館とバス停の間の樹木伐採を観音崎公園事務所に依頼しました。
- ・ 園路脇のロープの劣化が激しいため、ロープの張替えを実施しました。

(清掃)

- ・ 日常の清掃について、人員が必ずしも充分ではない（開館前 4 名・日中 1 名）ので、利用状況に応じて重点を移す効率的な清掃を心がけています。
- ・ 開館以来、清掃されていなかった、屋根裏の螺旋階段周囲を重点的に清掃しました。

(休憩所)

- ・ 繁忙期（GW・夏季）の休憩所を確保するため、山の広場に屋外休憩所（テント）を設置しています（20 年度以降毎年）。なお、強風等によりテントの劣化が激しいため、テント以外の方策を検討していきます。

(スタッフ対応)

- ・受付や展示監視に従事するスタッフは、来館者と直接接するためクレームの対象となりやすく、特に展示監視は来館者への注意なども業務として行うため、どうしてもクレームと切り離せない状況です。スタッフ対応に関わるクレームは現在でも年に数件はありますが、受託事業者の自助努力（研修、スタッフの入替など）や、館内における情報の共有化の促進によって日々改善の努力を続けており、21年度以降は満足度の数値も一定以上の水準に達しているといえます。
- ・運営事業者連絡会議の開催（21年度以降継続）
→レストラン、ショップ、受付、展示監視、広報・総務・学芸の各担当が月1回集まり、館内で起こっている諸問題について情報共有、改善の提案をしています。
24年度からは、新たに警備にも参加いただくこととしました。
- ・展示監視日報の作成（21年度以降継続）
→情報共有、対応方法の指示をきめ細かに、リアルタイムで行うため、来館者からのクレームの内容、対応等の記録、報告を展示監視事業者に対して義務付けています。
- ・受付、展示監視研修の実施（22年度以降継続）
→来館者対応のロールプレイング研修を実施しました。

(ミュージアムショップ)

- ・横須賀美術館オリジナル商品（エコバッグ、ボールペンなど各種）の作製販売や、季節に合わせて「日本手拭い」の柄を変える、また夏季に風鈴を販売するなど、満足度向上のための自助努力を継続しております。
- ・谷内六郎館内ショップ閉鎖（21年度以降継続）
来館者数の減少に伴い事業者の要望を受け入れ閉鎖しておりますが、繁忙期は開店するなど臨機に対応しております。

(レストラン)

- ・運営事業者の自助努力（スタッフの充実、メニュー改善など）により満足度はかなり向上しています。満足の理由として多いのは、「質の高い食事」のほかに「景色がよい」こと。また、随時、メニューの見直しを行い、低価格帯メニューが豊富になったことで、過去に意見の多かった「価格設定が高い」という意見は激減し、ランチタイムの客数は目に見えて増加しております。その他、室温に対する不満（夏暑く、冬寒い）についても、空調機の増設（23年度）により解消されてきております。不満の理由としては、「長時間待たされる」、「混んでいて入れない」など利用したくてもできないケースへの意見が目立っています。
- ・企画展ごとに「コラボメニュー」を考案して提供しています。（21年度以降継続）
- ・混雑時の顧客のストレスを軽減するため、土日祝日については事前予約をとらず、先着順に対応。（21年度以降継続）
- ・混雑が予想される連休等にあわせて、ケータリングカーを誘致し、より多くの来館者に食事を提供できるようにしています。（20年度以降継続）

(災害時の対応)

- ・例年通り年2回の防災訓練を実施しました。24年度は避難誘導に重点を置きました。東日本大震災のあった23年度に較べると、訓練参加者の危機意識の低下が若干見受けられました。

(その他)

- ・混雑時の来館者整理のため、ベルトリールパーテーションを追加購入しました。
- ・社会情勢を鑑み、来館者に影響を与えない範囲で、節電を継続しています。

【次年度への課題】

- ・来館者アンケートについては、今までの5段階評価に加え、特によかったところ、よくなかったところを具体的に記入していただく欄を24年度から設けました。また、他館のアンケートについて現在調査を行っており、よりご意見をいただきやすくするアンケートにしていく検討を行っていきます。
- ・休憩所、特に飲食可能な場所の確保については、ハードにかかわることであり、長期的な課題として認識しています。
- ・美術館入口や順路が分かりにくいとの意見が寄せられているため、館内サインの見直しを継続します。
- ・災害発生時の帰宅困難者対策を検討します。

⑦ すべての人にとって利用しやすい環境を整える

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
C	A

【達成目標】 福祉関連事業への参加者数のべ 400 人

〔目標設定の理由〕

過去 3 年（平成 21 年度～平成 23 年度）の参加者数の平均が 362 人であることから 400 人としました。

〔一次評価の理由〕

- ・ 24 年度の福祉関連事業への参加者数はのべ 229 人となり、目標に到達しませんでした。

（福祉関連事業への参加者数）

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
講演会	27	35	22	29
ワークショップ	16	43	22	19
みんなのアトリエ	101	114	111	90
その他	250	347	0	91
計	394	539	153	229

- ・ 講演会やワークショップの参加者数は、ほぼ例年並みだったといえます。
- ・ 福祉パフォーマンスは、22 年度に企画し、震災のため中止していた野外音楽会をもとにして実施しましたが、例年のような参加者数を得られませんでした。企画展との関連性が失われ、周知を徹底しきれなかったことも原因のひとつと考えられます。
- ・ 第 4 期所蔵品展に関連して実施した「触察体験」の参加者を「その他」に加算しています。

【実施目標】 年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう（環境づくりの）ための各種事業を行う。

必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。

【目標設定の理由】

- ・各種事業を通じて、美術館が健常者のみの施設ではないこと、障害の有無に関わらず美術を楽しめること、また各年齢や状況に応じた楽しみ方があることを伝えていきたいと考えています。
- ・設備や什器を新規に導入するよりも、対話鑑賞のような人的対応を充実させることのほうが、福祉の充実につながると考えています。
- ・障害者のニーズを、職員が実践を通して知ることによって、次年度以降の取り組みや長期計画に活かしていきたいと考えています。

【一次評価の理由】

- ・障害児向けワークショップ「みんなのアトリエ」では、2008年の開催初年度から参加していただいているリピーターに加え、新規での参加希望者が5組以上増えました。チラシやHPでの広報活動や、参加者の口コミが広がっている表れと感じます。
- ・福祉講演会では、海外から講師を招き、視覚障害を中心とした障害者に開かれた美術館づくりについて、ケ・ブランリー美術館（フランス）の事例を紹介していただきました。
- ・福祉ワークショップでは、からだを動かすことを通じて、どんな人でも楽しく参加できるワークショップを実施しました。暗やみで、ライトなどの光源を手に持ってからだを動かし、露出を長くして撮影すると、思いがけないからだの動きがあらわれました。新聞でも紹介されるなど、好評でした。
- ・福祉パフォーマンスは、年齢、障害の有無を問わず参加いただけるよう、屋外での演奏会を開催しました。車椅子の方やそのご家族の参加がありましたが、参加者が実際に音を出して演奏に参加する場面が少なく、やや一方向的な演奏会となってしまったことは残念でした。今後同様のプログラムを実施する時は、パフォーマンスへの参加を促す工夫を行います。
- ・第4期所蔵品展では、視覚障害のある人の美術鑑賞について美術館として学んできたことの実践として、触角や聴覚、言葉による鑑賞を提案する内容の特集展示「指先、言葉でつむぐ美術」を行いました。あわせて、学芸員のナビゲートのもと、彫刻作品を手で触れて鑑賞するなど、触角による鑑賞体験の機会を設けました。（会期中の毎週日曜日 14:30 から。8回実施、29人が参加）

【次年度への課題】

- ・「みんなのアトリエ」についてはリピーターも多いため、新たな素材を取り入れるなどして活動内容を刷新し、参加者の期待を維持する必要があります。また、毎年3月にワークショップ室で行っている1年分の作品展示については、観覧者から好評をいただいているため、情報の充実を図るなど、広報活動の場としてさらに活用できると感じました。
- ・第4期収蔵品展 特集展示に関連して実施した触察体験では、健常者の方からは普段とは違う鑑賞となり肯定的な意見をいただきましたが、視覚障害を持つ方からは内容が不十分とのご意見をいただきました。今後、同様の鑑賞を行う場合、障害の方

へヒアリングする必要があります。

- 福祉パフォーマンスは、雨天など天候に左右されがちな屋外でのイベントにせず、館内で参加できるイベントにするなど、障害のある参加者の安全面も考慮に入れながら、魅力ある企画を検討します。
- 養護学校については、来校した 2 校から事前授業の依頼があり、好評でした。ただし、学校・学年によって障害の程度が大きく変わってくるため、入念な準備のうえ、前向きに事前授業の実施に取り組んでいきます。

⑧ 事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
C	B

【達成目標】美術館全体で年間に使用する電力量を前年比△5%とする

〔目標設定の理由〕

美術館は社会教育施設であり、収益をあげるための施設ではありませんが、公の施設として、効率的な運営が求められています。事業の質を担保しつつ、経費を削減するためには、管理部門での効率化を目指すしかありません。23年度に発生した東日本大震災に伴う電力不足以来、社会全体に節電が求められていることもあり、引き続き、年間使用電力量の削減を目標としました。

〔一次評価の理由〕

電気使用量は前年比 1.4%増という結果となり、△5%を達成することはできませんでした。具体的な理由としては、以下のとおりです。

- ・23年度は東日本大震災の影響で最大限の節電を実施しており、利用者にご不便をおかけしている面もありました。（トイレのエアタオルの使用停止、冷暖房温度の設定など）
- ・24年7月から無理無駄のないスマートな節電を実施することになり、利用者にご不便をおかけしている個所の節電を一部解除しました。また、酷暑による夏季の電気使用量の増加が影響しています。

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
電気使用量 (kwh)	3,049,128	2,946,360	2,525,376	2,559,600

【実施目標】職員すべてが費用対効果を常に意識し、効率的な運営を行う

〔目標設定の理由〕

サービスの質を低下させずに経費削減を目指すため、職員全員が費用対効果を常に意識した行動が必須であると考え、実施目標としました。

【一次評価の理由】

事業を実施するに当たり、費用対効果を意識した仕様書の見直しを実施しました。
事業者選定においても、複数業者から見積書を徴収し競争入札を行い、業務の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を執行し、経費削減を実現しています。
具体的な内容の主なものは、次のとおりです。

- ・特に展覧会の委託関連の予算執行にあたっては、費用対効果の観点から委託内容を見直し、仕様書を再点検し、経費削減に努めています。
- ・事業者選定においては、定められた基準等により契約額及び契約先は入札によって決定することになります。24年度は、特定の業者でなければ実施できない業務を除き、基準外の業務も見積合せを実施しました。この結果、事業の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を実施できました。
- ・展覧会関連の出張については、宿泊経費がかからないよう出張経路を最短に設定し、旅費の経費を削減しています。
- ・事務用品に関して、在庫整理を行い、死蔵品を活用し、消耗品費の削減に努めています。

【次年度への課題】

電力量の削減については、利用者にご不便をおかけすることのない範囲での節電に取り組んでいきます。

【前年度二次評価における指摘事項への取り組み】

- ・達成目標を電力量の前年比とすべきではない。
 - ・達成目標を客観的基準に変更すべき。
- 職員全員で取り組むことができる達成目標を検討しています。

運営評価委員会による二次評価

I 美術を通じた交流を促進する

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	B	B	特別企画展を含めるか否かによって、評価が分かれる。特別企画展については、館の経営に資する効果と、設置目的との整合性との両面から分析する必要がある。

- ・達成目標を下回ったが、経済部の企画を切り離し、美術館の企画に限定した点は評価できる。[小林]
- ・横須賀市の人口に鑑み、約10万人の観覧者目標は、決して容易な設定値ではないと思います。[柏木]
- ・日本の洋画の展覧会は、概して、来館者を獲得できない傾向(全国的に)にあります。[柏木]
- ・経済部が主体となったイベントについては、館の経営・ミッション両面で、評価分析をするべきと考えます。[柏木]
- ・美術館としての特別企画展の位置づけにより、評価は変化する。現段階では1次評価と同様とする。ただし、特別企画展の位置づけの明確化は、今後の当美術館の性格づけや運営面でも重要な課題と考える。[菊池]
- ・特別企画展は、目標①にとっては有効な手段であったのだから、評価の対象に加えるべきではないか。[久保]
- ・今年度は、経済部特別企画展の影響で、企画展の開催日数が少ないことを考慮すると妥当な数字だと考えられる。[黒岩]
- ・リピーターの割合が46.6%と半分近い値なのは、美術館としての存在が広く認知されてきたと考えられる。[黒岩]
- ・市内居住者の割合が40.6%と安定しているのは、市民の美術館という意識が定着してきたと考えられる。[黒岩]
- ・特別企画展「70's バイブレーション」の入場者数は少なかったが、アンケート結果からみて40代、50代の男性観覧者の割合が高いことから、1ヶ月の会期で来館可能日が週末に限られてくることが要因の一つとして考えられる。[小島]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	広報の精度、効果は上がっていると感じられる。

- ・パブリシティの活動に関しては美術館の努力を評価することができる。気になる点は、美術系雑誌の掲載件数が平成24年度になって大幅に減少したことである。何故なのか、・・・美術館の展示企画と関係しているのか。[小林]
- ・市民の来館者が増えていること、リピーターが増加傾向にあることは、これまでの広報周知が一定の効果を挙げつつあることを示していると考えます。[柏木]
- ・露出度の向上、掲載のタイミング、メリハリ等、広報プロモーションは年々精度が上がっている。[菊池]
- ・情報掲載数が目標を達成したことは評価できるが、初来館者の割合が 53.4%と減少傾向にあることは課題である。[黒岩]
- ・認知手段のトップが学校へのちらし配布である。今後も継続して行ってほしい。[黒岩]
- ・ポスティングでの広報活動は、場合によってはクレームの対象になりえるので控えた方がよいと思う。[小島]

②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	S	S	かなりの努力が認められる。質を維持するように留意しながら、多くの市民が交流できる活動を続けてほしい。

- ・目標数値だけでなく、ボランティア活動の意味合いが大事になってくるのではと思います。

[原田]

- ・学芸員をはじめ美術館関係者の努力を評価したい。この領域の課題は今後の美術館活動や運営を考えるにあたって重要な点になる。[小林]

- ・ボランティアの活動に対する満足度も評価にあたって勘案すべきかと思います。[柏木]

- ・ボランティアの増加は、運営面で大変心強い応援団となる。特に、一般参加者の増加はボランティアへの参加誘導の成果と考える。量だけではなく、質の面でも努力がみられる。

[菊池]

- ・一般参加者数が大きく伸びていることは評価できる。より一層の内容の充実と回数の増加等、次年度に生かしたい。[黒岩]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	ボランティアの活動を育むため、気持ちのこもったケアが行われている。質の高さはこの美術館のポテンシャルでは限界に近づいており、量的な成果から見ても、Sに近いA評価である。

- ・横須賀美術館の実施目標とした姿勢は今後とも培うべき課題である。横須賀美術館のこれまでのボランティアへの対応を高く評価している。[小林]

- ・息の長い市民協働のあり方として、さらに興味深い演出やボランティアへの還元メニューなどモチベーションの充実に尽力願いたい。[菊池]

- ・ボランティアの企画したイベントが地域行事として定着している点とボランティア登録者が増えている点は評価できる。[黒岩]

- ・サポートボランティアが研修の一環として作家のアトリエを訪問できたことは、大きな収穫となったのではないか。[小島]

- ・横須賀美術館のスタッフと規模でできるボランティア活動の、質、量ともに最大であると思う。[柏木]

Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

③調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	A	A	目標を達成したことは評価できる。企画展の満足度は、手応えを感じられる指標ではないか。もっと上を目指してもらいたい。

- ・「ストラスブール美術館展」や「女性の情景展」といった展示が、市民や女性に満足感を与え、達成目標の80%を上回ったことについては評価できる。ただ、80%という割合の根拠については過去の数字だけでよいのかどうかといった課題は残る。[小林]
- ・アンケートによる満足度の算出方法を明示されるべきかと考えます。[柏木]
- ・学芸員の方々が、最も手応えを感じる目標値ではないか。ますます、充実(90%超)に向け尽力願います。[菊池]
- ・企画展の満足度が、昨年度から微増の80.9%あることは評価できる。[黒岩]
- ・企画展の満足度の指針は美術館運営の根幹を成すもので、全体的な満足度のみでなく、展示作品数の妥当性、クオリティの高さなどの調査も意識すべきではないか。[小島]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	展覧会、教育普及において、意欲的な取り組みがみられる。美術への理解を深める工夫がなされている。

- ・横須賀市や横須賀美術館の立地性を考え、満足度のいく企画展の外にも、美術への理解を深める教育普及事業の企画も必要である。[小林]
- ・独自の視点に基づくテーマ展の立案や、ゆかりのアーティストの掘り起し、市内他施設との連携など、意欲的な取り組みが見られました。[柏木]
- ・学生ボランティアなどの参画を促し、出口調査など、来館者の負担にならない程度のヒアリングなども有効では。[菊池]
- ・年間6本の企画展に特色をもたせると共に、内容に応じて音声ガイドや鑑賞ガイドを用意し知的好奇心を満足させている。[黒岩]
- ・展覧会関連のワークショップ「挑戦！ 英語で美術鑑賞」は興味深い企画で、個人で海外の美術館を鑑賞する際に役立つ。[小島]

④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	A	A	中学生以下の観覧者数は前年度より減少しているが、特別企画展の影響があるなか、相当の成果を挙げたことは評価に値する。

- ・横須賀市の立地性を考え、子供の教育施設としての美術館の在り方も重要であり、その意味では、実施目標と関連しての計画は十分に実施されていると言える。[小林]
- ・経済部主導のイベント実施に伴い、所蔵品展を閉室したことに對する学校団体からの厳しい指摘の意味を熟慮し、美術館の本来のミッションと来訪者誘致の在り方を再確認すべきかと思われます。[柏木]
- ・本テーマへの対応には、新たな取り組みも見られ生徒や園児の目線を考慮した努力が感じられる。[菊池]
- ・数値目標を達成したことは評価できる。前年度に比べ小中学生の観覧者数が減少したことは課題である。[黒岩]
- ・学校、学年単位での観覧者数のみにとらわれるのではなく、本来美術に関心のある中学、高校の美術部員達を招き、じっくりと鑑賞できる場を提供することが、彼らの今後の部活動における作品制作の参考になると思われる。[小島]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	学校との連携が定着をみせるなか、特別企画展の期間、所蔵品展を見せられなかったことは遺憾。現場の努力を評価する意味でAとする。

- ・学校との緊密な連携が定着している感がある。さらに、学校教育から派生してクラブ活動との連携など、鑑賞教育だけでなく美術館が実践を学ぶ場へと、幅広い教育施設として模索はできないか。[菊池]
- ・幼・保・小・中学校と美術館との連携した取り組みが、積極的に進められている点は大いに評価できる。[黒岩]
- ・特別企画展で一番困るのは、子どもたちに絵を見せられないこと。[黒岩]
- ・学校を通じ子ども達に美術館来訪についての感想文を書いてもらい、美術館の全体的な印象、作品鑑賞の感想などを把握できれば、子ども達への美術教育活動への取り組みに活かすことができると思われる。[小島]

⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	—	—	数値目標は挙げられていないが、たとえば環境調査の実施回数などは指標となりえないか。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	C	C	相変わらず、作品購入費がないのは遺憾。現状では収集の主体性が損なわれるおそれがあり、情報も集まらない。少額でもよいので継続的に充当すべき。

- ・作品の購入予算がないことが、実施目標の達成に至らない大きな要因になっていることは、美術館としては重要な問題を包含していることになる。[小林]
- ・所蔵作品管理、作品収集に関する美術館としての取組みは過不足ないと思います。作品購入費の財源確保については、美術館も努力する必要がありますが、まずは、美術館の設置者で所蔵品の所有者である横須賀市の政策判断になると思います。その意味で、2次評価はFとすべき側面もあると考えます。[柏木]
- ・美術品の購入が途絶えると、優れた美術品の情報が集まらなくなり、将来的な美術館活動に影響する懸念が強くあります。[柏木]
- ・収集を寄贈のみに頼っている現状では収集活動にも限りがあり、判定不能とせざるを得ない。[久保]
- ・作品購入予算が見つからない中では、C評価が妥当だと考える。[黒岩]
- ・横須賀の姉妹都市に美術館活動に関しても協力を仰ぎ、互いの所蔵作品を一定期間、交換展示する。[小島]
- ・専門的な知識が必要であり、評価できない(判定不能)。[菊池]

Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	B	B	スタッフ対応の満足度が伸び悩む要因について、客観的な現状分析と対策が望まれる。

- ・過去の数字から割り出されたものであるが、90%以上という満足度の設定がどういものか検討の余地があるように思える。[小林]
- ・経済部主導のイベントなど、来館者が増える事業を実施する場合は、当該事業でアメニティ確保のための必要経費の予算化が不可欠かと考えます。[柏木]
- ・特別企画展の影響とあるが、平常時の満足度との比較など、明確な検証ができていますか。[菊池]
- ・集客施設は、来館者の増減にかかわらずどのような場面でも、満足していただける対応を心がけることが使命となる。[菊池]
- ・スタッフ対応度のアンケート結果の検証に対するコメントがない。項目が少ないため? [菊池]
- ・検証方法、アンケート項目についても改善すべき。[菊池]
- ・満足していただけるお客様を一人でも多く増やすことが、サービス業の目標である。努力目標をスタッフ全員、繰り返し意識に入れる。アンケートのご意見やクレームも、スタッフ全員で共有し、確認し、対応をしながら向上していくことが必要。[久保]
- ・エントランス脇の化粧室が混み合っている時は、図書室の化粧室の利用も案内する。[小島]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	B	B	サービスの質の向上は困難な課題だが、クレームの要因を的確に把握し、継続的に改善に取り組んでもらいたい。

- ・ハード面の改善は、資金面等で止むを得ないが、人的(スタッフ)対応については即時改善が可能である。いろいろ努力の跡が見えるが、やはり来館者がどう感じているかをつぶさに把握する方策を全員で検討し、スピード感を持って改善することが、ファンを増やすことにつながると思う。[菊池]
- ・要所に花やグリーンが置かれていると、安らぎ感が得られると思う。[小島]

⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	C	C	行事一回の成否によって評価が左右されすぎる。前年度を踏襲した目標設定のしかたも安易。当年度の事業計画に基づいた慎重な目標設定をするべき。

- ・神奈川県ライトセンターなどとの連携は取り組まれていますでしょうか。[柏木]
- ・計画段階での課題なのか、結果として成果が上がらなかったのかが、理解できない。現段階では一次評価と同様とする。[菊池]
- ・パフォーマンスの参加者以外はほぼ毎年安定しており、この項目の増減のみで評価が左右されるべきではないと考える。[久保]
- ・福祉パフォーマンスの参加者が少なかった点については、来年度に向けて内容の検討が必要である。[黒岩]
- ・障がい者や高齢者は体調管理が難しい方もおり、福祉関連事業の開催時期は外出するのに適した気候の良い季節の実施を増やすことも考慮してみたいか。[小島]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	内容の濃い取り組みをしている。外部から専門的な知識をとりいれながら、広く関係各所と連携をとって、数量的な成果にもつなげてほしい。

- ・公立美術館の課題として、障がいの有無に係わらず美術を楽しむ環境づくりは、今後とも重要な課題である。達成目標とは別に、実施目標への対話鑑賞等の人的サポートの導入は評価したい。[小林]
- ・障がい者と健常者が自然に場を共有できる雰囲気演出する努力がうかがえる。[菊池]
- ・各種事業内容の充実と共に「触察体験」の実施など、新たな試みが行われている。[黒岩]
- ・高齢者ホームでの生活者のレクリエーションの一環として、美術館を来訪してもらえよう、「敬老の日」の無料招待を検討してみたいか。[小島]
- ・量と質の問題であり、全く違う二つの基準で一つの事を評価して良いのか。[久保]
- ・質の面で非常に良い取り組みをしている。充実した内容を集客に結び付ける何かが欠落していると解釈せざるを得ない。[柏木]
- ・障がいのある方に関わることは、努力だけでなく専門的知識が必要なのでは。[原田]
- ・専門的なワーキングが必要。質を高め、関係者を巻き込んだ取り組みを実施し、計画・目標を設定してはどうか。[柏木]

⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する。

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	C	C	使用電力量の削減を目標とすることは、節電には限界があることから、また美術館の特性から見ても、ふさわしくない。

- ・適切な保存環境を必要とする美術品を収蔵し、来館者を心地よく迎えることが不可欠であるという施設の特性に鑑み、他律的要因に左右される電力消費量の定量的削減を達成目標とすることの是非が検討されるべきかと思います。私見では「非」です。[柏木]
- ・達成目標については、「経年比較すると限界が来るので、震災の前年度を基準とすることが妥当」などと、見直しを求めた記憶があるが…。[菊池]
- ・電気の使用量を見ればC評価となるが、来館者数やイベント、気候にも影響されるので、この項目だけで評価するのは難しい。[久保]
- ・社会教育施設として最低限必要な電力量を目安として、目標設定する必要がある。[黒岩]
- ・年間の電力使用実績に基づいて、東京電力の最適料金プランの見直しのため、電力会社に契約プランのアドバイスを受けた方が良い。[小島]
- ・会社、学校なども電力量を目標に掲げているが、美術館にはふさわしくないと思う。[原田]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	B	B	費用対効果のみでの評価に適さない事業もある。特に美術館の運営にとって、削減すべき費用とはなにか、原点にたちかえって検討してほしい。

- ・各事業に人的資源がどれだけ投入されているか、すなわち、職員や臨時職員等の人件費がどれだけ投下されて事業が実現できているのか、という視点を持ちつつ、事業によっては、費用対効果のみで評価されることがないように留意すべきと考えます。[柏木]
- ・日常的にコスト意識が芽生えることが大切であり、一歩々々努力がうかがえる。引き続き効果検証し、全員が手応えを共有できるよう成果を可視化する努力を期待する。[菊池]
- ・電気以外の具体的な指標がないので評価はできない。[久保]
- ・競争入札は大いに活用すべきだと思う。[小島]

4 横須賀美術館運営評価委員会 委員名簿

(50音順)

	氏名	役職等	区分
委員長	小林 照夫	関東学院大学名誉教授	学識経験者
委員	菊池 匡文	商工会議所事務局長	地域経済関係者
委員	柏木 智雄	横浜美術館学芸グループ長	美術館関係者
委員	久保 由樹	観音崎京急ホテル社長	地域関係者
委員	黒岩 弘明	北下浦小学校校長	学校関係者
委員	小島 江美	市民委員	市民委員
委員	原田 美穂子	市民委員	市民委員

5 横須賀美術館運営評価委員会条例

(設置)

第1条 博物館法（昭和26年法律第285号）第9条の規定に基づき、横須賀美術館の運営の状況の評価及びその評価の結果に基づく改善策に関し、教育委員会の諮問に応ずるため、本市に地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の4第3項の規定による附属機関として、横須賀美術館運営評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、委員7人以内をもって組織する。

2 委員は、市民、学識経験者、関係団体の代表者、学校教育関係者、社会教育関係者及びその他教育委員会が必要と認める者のうちから教育委員会が委嘱する。

3 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第3条 委員会に委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

(会議)

第4条 委員会の会議は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、会議を開くことができない。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員会において必要があるときは、関係者の出席を求め、その意見又は説明を聴くことができる。

(その他の事項)

第6条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の同意を得て委員長が定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、平成25年4月1日から施行する。

(経過措置)

2 第2条第3項の規定にかかわらず、この条例の施行後初めて委嘱された委員の任期は、平成25年9月30日までとする。

平成 24 年度 横須賀美術館 運営評価報告書

平成 25 年 7 月

横須賀市教育委員会美術館運営課

〒239-0813

神奈川県横須賀市鴨居 4-1

TEL 045-845-1211